# Colorful Arrangement！

## FLOWER KNIGHT GIRL 合同小説誌

## CONTENTS


―少女の儚いユメ―・Rui ..... 3

変化していく日常の中で・田中裕一 .....79

ラベンダドール・ヤンデレラ・葉山譲二 .....119

団長さんがいない夜・白雪の無白 .....175

護り手の誓い・宮下翔一.....227

# はじめに

この合同誌主催の宮下翔一と申します。

２０１６年年末から本格的に同人活動を初めて、ついに合同誌を手がけることとなりました。数年前なら思いもしなかった活動の実現に、自分自身が驚いています。

この合同誌でも参加されているＲｕｉさんからブラウザゲーム「フラワーナイトガール」を紹介していただき、じゃぶマイ３にて一番好きな花騎士・トリカブトを主人公とした作品「死与の少女」をリリースしました。その際に自分と同じく同人小説を書かれている方々を知り、この度参加者を募って、小説合同誌「カラフルアレンジメント」の製作に踏み切らせていただきました。

初の合同誌なので編集作業などに不慣れな点も多くありましたが、無事に即売会にてリリースできた事をとても嬉しく思います。どの作品も、非常に愛あふれる無二の作品へと仕上がっており、最高の出来栄えを誇っています。

まずはこの本を取ってくれた方々に深い感謝を。

私達が描く、私達が送る、虹色の花束（カラフルアレンジメント）。

どうか最後までお楽しみください。

宮下翔一

— 少女の儚いユメ —
Rui

常夏の世界花バナナオーシャン。
七つの世界花が存在するスプリングガーデンの丁度、南に位置するこの国は、常に強い日差しと、豊かな海を中心とした観光資源に富んだ国だ。
そんな風土からか、国民たちは陽気で常にお祭り騒ぎの愉快な国、と他国からは認識されている。
確かに脳天気な国柄ではあるが、海を挟んだ西方には枯れた世界花コダイバナが存在しており、事実上危険地域と密着しているため、ある程度の緊張感は保たれているようだ。

世界の敵である害虫。元々は人々と共生していた益虫たちの成れの果て。
かつては頼もしいパートナーだった彼らは、コダイバナを中心として広がった何らかの力によって凶暴化し、人々へと仇なす存在へとなり下がった。
その害虫との戦いは、既に千年続いていると言う。

害虫に対抗できるのは花騎士（フラワーナイト）のみ。世界花より加護を受けし、花の名を持つ戦乙女たちの称号。
厳密に言えば彼女たちは、本当の意味での騎士ではない。
長年続いた戦争のうちにその意味は変化し、害虫と戦う力を持った彼女らを、人々は尊敬の

念を込めて花騎士と呼んだ。

しかし強大な力を持つ花騎士と言えど、激戦において命を落とす者は少なくはない。各国はその戦力の補填には常に頭を悩ませていた。

提案された対策の一つとして、それぞれの国家は、花騎士誕生の地ブロッサムヒルの教育課程を元にした花騎士学校を設立し、新しい花騎士の育成に積極的に励んだ。

才能あるものは、その能力を開花させ、強き力となって人々を守る花騎士となる。

バナナオーシャンの花騎士学校でも、卒業を間近にした少女たちが自らの将来について、不安と期待を胸に、お互いの進路についての相談を交えた雑談に花を咲かせていた。

「キヌタソウ。あなた進路どうするの？」

「う～ん、まだ悩んでるんですよねぇ」

同級生の問いかけに、白い長髪の少女は曖昧に答えた。キヌタソウと呼ばれた彼女は、素朴ながら整った顔立ちをしていた。長い髪をまとめるヘアバンドには控えめな白い花の飾りがあしらわれている。

バナナオーシャンの首都にある花騎士学校。
今期卒業する少女たちの数は三十人あまり。年々、減っている花騎士候補生としては、まずまずの数だ。
花騎士学校は完全なエスカレータ式ではないが、よほど適正に問題がない限り、入学してしまえば、ほぼ卒業することが出来る。
とは言え、世界花の加護が十分得られていないとなれば、実際に花騎士となるのは難しい。花騎士の才能とは、簡単に言ってしまえば、世界花からの加護に他ならない。

卒業の季節になると、各国の花騎士学校へ、求人募集の通知が届く。各騎士団の都合で、新たな戦力を欲しているのだ。
その中から卒業生たちは、自分の希望に合ったものを選び入団試験を受ける。試験内容は様々だが、その合否で後の人生が変わる少女が殆どであろう。
世間では、この時期は就職戦争と揶揄されていた。

考えながら「う～ん」とキヌタソウが伸びをすると、声をかけてきた友人の視線が胸に集中していることに気づき、ハッとする。所謂『紐』なバナナオーシャン特有の薄着のお陰で、たわわに実った双丘を隠す術はない。

# 変化していく日常の中で

田中裕一

1.

夜の空を見上げていた。空には月が浮かんでいた。

「サンカクサボテンも座ったらどう？」

岩の上に腰かけたルナリアが、こちらを見上げて手招きをしている。隣に座れ、ということだろう。

「それじゃあ、少し失礼するよ」

そう言って、ルナリアの右隣に腰を下ろした。岩の表面は夜の空気で思いのほか冷たくなっていて、着物越しに、お尻が少しひんやりした。

「最近、ちょっと冷えてきたね」

「ん、サンカクサボテンもそう思う？」

「夜になると、一気に冷え込むようになったわ」

「そうね。昼間の日差しも幾分柔らかくなったし、そろそろ秋の足音が聞こえてきそう」

ルナリアはおもむろに目を閉じた。息を潜めて、耳を澄まして、まるで本当に秋の足音が聞こえているかのように振る舞うその姿は、妙に艶やかで綺麗だった。

「そのうちここも、虫たちの声でいっぱいになる」

「そうね」

「まだ青々と茂っている草木たちも、少しずつ、色とりどりの葉を身につけて私たちを楽しま

せてくれる」
「うん」
「ホクホク芋やホクホッ栗が、待ち遠しくなってくるわ」
「スズランノキが言うには、今年も豊作なそうだよ」
「まぁ、それは是非とも食べに行かなくちゃ」
「そうね、今度一緒に行こう」
夜の空を見上げながら、他愛のない会話をする。夜の静寂が、そこに響くルナリアの声が、サンカクサボテンにとってはなんとも形容のできない心地よさだった。
「けれど、おかげで厄介ごとが増えてしまった」
「……厄介ごと？」
「暑さにやられて意気消沈していたあの悪戯ウサギ共が、少しずつ元気になってきたの」
ウサギノオ、ススキ。二人の花騎士を、いや、二匹の問題ウサギの顔を思い浮かべた。
「今日なんて、あやつら団長のお茶に唐辛子の出汁を仕込んでいたわ。偶然私が見つけたからよかったものの、アレを団長が飲んでしまったらと思うと……」
「あらあら」
ウサギノオとススキは悪戯の常習犯として、騎士団内ではその名が知れ渡っている。毎日のように誰かが悪戯のターゲットとなり、食事の席では決まって、今日はどこの誰がやられたぞ

という話題が出るほどだ。

彼女たちに悪意はない。それは騎士団にいる者全員が知っている。悪戯の内容もほとんどが可愛いレベルのもので、笑って済ませてしまう――それなりに驚かされはするけれど――ことが多いのだけれども、やはり、彼女らの行為がプラスになると言い難いのも事実だった。

「いやはや。あやつらが花騎士として、人として、一人前になる日は来るのかしら」

サンカクサボテンは夜空に浮かぶ月を見上げた。綺麗な満月だった。

はるか昔、どこかの国では月にウサギが住んでいると信じられていたらしい。しかも、そのウサギは月面で餅つきをしているのだそうだ。

「ウサギの餅つき、か……」

ウサギノオとススキが大きな臼と杵を前にして、せっせと餅つきをしている姿を想像してみた。驚くほどに、似合っていた。

ウサギノオが杵を振り、ススキがこねる。脱兎のごとく我が道を行くウサギノオを、隣でサポートするススキ。そんな風に花騎士として、人として、お互いに成長しあってくれればいいなと思った。

「それにしても、今晩も見事な満月ね」

サンカクサボテンが言った。

「そうね、一度見たら目が離せなくなってしまうくらい、美しい」

# ラベンタドール・ヤンデレラ

葉山譲二

／ブロッサムヒル・騎士団本部

目を開いてはいられない光が瞼に突き刺さる。

光が直接刺激する朝告げに、とても目を閉じてはいられなかった。けれど窓から差し込む眩しさは、やはり目を開いてはいられなく、光に背を向けるように布団の上を転がる。

見慣れた机と椅子、見慣れた部屋、見慣れた風景。

一度だけ目を閉じ、深く呼吸をする。休息したままの身体に活動するための酸素を浸透させる。脳に、臓器に、血管に、筋肉に。僅かに熱を取り戻したような気がする身体を起こして馴染ませるように関節をほぐす。

今すぐに害虫の襲撃があったとしてもすぐに行動できるように、起きたらすぐに身体を動ける状態にしなければならない。そう思って始めた寝起きのストレッチだが習慣付いてみれば中々に悪くないな。身体を動かせば血液循環がよくなる。何をするにしても覚醒している状態の方が、本来の力を発揮できるという物だ。

さて、着替えて朝食としよう。騎士団長たるもの花騎士（フラワーナイト）達の模範となるために、いつまでもだらしない格好をしていては駄目だ。

クローゼットを開ける。皺のない綺麗なシャツが何枚と並び、丁寧に折り目の付いたズボンがやはり何本と釣り下がっている。

「おはようございます団長さん」
「おはよう」
そして服が並ぶその下に、ラベンダーがちょこんと体育座りで待ち構えていた。
嬉しそうに微笑むその目の下にはクマが確認できる。一晩中起きてたのか？
「着替えるからちょっと待ってろ」
勿論です、と甲斐甲斐しい返事をするラベンダーに頷いて、シャツとズボンを手にする。あまり彼女を待たせても悪い、手早く着替えてしまおう。
うむ、新品同様の衣類に袖を通すこの感触、実に気持ちがいいものだ。グッジョブだナズナ！
制服を着る必要は……ないか。国から視察が来るなんて聞いてないしな。必要最低限の準備だけしておこう。
「よし朝飯いくか？」
はい、と悦に入った声が返ってくる。
なぜ彼女がここにいるのか、それは些細なことである。以前起きたらベッドの隣で寝ていたこともあるし、ベッドの中ならまだしも下にいた事もある。本棚と本棚の隙間にいた時はさすがに肝を冷やしたが、それもいい思い出だ。
だから、こいつがクローゼットの中にいるなんて普通だな、普通。
慣れとは恐ろしいものだ。いや、それに慣れてしまう俺が恐ろしい。

# 団長さんがいない夜

白雪の無白

夢を見る。あの日から変わらない夢を。
爆音、悲鳴、血の匂い、倒れて行く仲間たち、大切な人。
団長さんは最後まで笑顔だった。体が引き裂かれていくのに、私たちに笑みを見せた。
足にまとわりついている害虫を何度も殴る。でも、害虫はびくともしない。
団長さんを見て泣き叫ぶギンリョウソウの声、彼女は動けないほど致命傷を負っているのに。
嫌だ…嫌だ、嫌だ、嫌だ。こんなの夢、酷い悪夢に違いない。
「団長さん……団長さん！」
夢から覚めても、鮮明に思い出す。それは夢ではないから。
全て現実、事実、真実、ほんの一か月前まで目の前に広がっていた景色。
「はあ……はあ……はあ……」
息を整え鏡に映る自分を見つめる。酷く青ざめた顔と流れ落ちる涙。膝を抱え、恐怖に怯える。
怖い……怖い、怖い、怖い。こんな思いしたくない。でも、逃げたくない。
ベッドから立ち上がり髪を結ぶ、団長さんが大好きと言ってくれたサイドテール。だけど、今は誰も褒めてくれない。
机の上に置かれている団長さんの写真に黙祷し、服を着替える。
もうこれが日常になってしまっている。
団長さんがいない騎士団の朝は今日も沈んでいるように見えた。

部屋出て数分、待ち伏せていたかのように若い女性が声をかける。
「おはよう」
「先生……」
この騎士団の主治医、一か月前の事件から大幅に人員が入れ替わり、事件前から警備部にいるのは私、ギンリョウソウそして先生の三人のみ。
「気分はどうリンドウ？」
「よくはないです……」
「その様子ね。保健室によって行く？」
「だいじょ――」
「いいからいいから」
いつも通り保健室に連れていかれる。ケガはもう治っているのに先生が何を考えているのか、私には理解することができません。
強引に引っ張られ、保健室に連行された私。先生はいつものようにお茶の準備をして、私は適当にベッドに……
「……」
座ろうとしたその時、ベッドの上に妙な物体を発見して手に取ってみると。
『ぶうっ』

おならに似た音が響く。もちろん仕掛けたのは。
「あ、リンドウおならした？」
「はあ……」
何か言う気力もないため、ため息をつきベッドに腰掛ける。
この先生……ホントにお医者さんなのか疑ってしまう。
「もう、冗談の通じない子ね。昔はもっと『なにこれ！』とか言ってくれたのに」
「朝からそんなに元気ではないですよ」
先生が出したお茶を一口飲み、再びため息がこぼれる。
「どう？　ケガの調子は」
「もう完治してます。普通に歩けますし……」
「ホントそれよね……花騎士って何でそんなに丈夫なのかしら。もう……軍医になればもっと多くの患者を抱えると思っていたのに、逆じゃあないの！　この前なんて、ケガしている子がいたから見てあげたらもう治りかけてるのよ？　しかもそれが一時間前のケガらしいのよ！信じられないわ」
世界花の加護により、常人離れしている花騎士も多数、普通の人では考えられないことだって沢山あります。
私はそんな花騎士の中では下だけど、擦り傷ぐらいなら一時間もあれば治るかな？

「ホント不思議よね……足の骨が粉々になってたのに。普通ならもう歩けなくなるわよ？」
「分かってます……」
「ギンリョウソウだって……内蔵のほとんどを損傷していたのに後遺症は一つもないし」
「私もギンリョウソウも早期に治療できたので」
ケガをした後、他の花騎士に助け出され速やかに治療を受けた。そのおかげで後遺症はない。
正確に言えば、肉体的には完治しています。でも、私はあの日の悪夢を忘れられない、ギンリョウソウは……
「さて、そろそろカウンセリングを初めようかしら」
「え……？」
先生は私に質問の間を与えず、カウンセリングを始める。
「最近どう？」
「どう…と言われましても」
「八時間以上寝れてる？」
「はい……」
睡眠時間、体重の激しい増減などはないか、食事は美味しく食べられているか……健康に関する基本的に質問が終わったあとには、これまたお決まりの質問が飛んできます。
「最近笑えてる？」

護り手の誓い
宮下翔一

スプリングガーデンの広大な土地の内、中心に位置する国、リリィウッド。
日がまだ登りきっていない時の中、薄明の大地を一頭の栗毛の馬が駆け抜けてゆく。
リリィウッドの国土を巡っている遊歩道として使われている林道の上で、ヒヅメが大地を蹴り込む音と、青年の勇みある掛け声が響いていた。
「もうすぐ、目的の場所ですね。団長さん」
青年の背後から、小鈴を鳴らしたかのようなか弱い声が響いた。花騎士のネリネだ。彼女はこの世界スプリングガーデンを脅かす、害虫から人々を守る戦士の一人である。
そして青年は、彼女たち花騎士を取りまとめるフライハイト騎士団の団長だった。
「そうだね、ネリネ」
ネリネが青年の身体に腕を回してしがみついている中、彼は振り返ることなく答えた。ネリネは彼を見ようと顔を上げる。
その横顔は真剣だった。日頃の柔和な鳴りは潜められている。
朝焼けの薄暗い世界の中、彼は過ぎてゆく林道の木々に視線を配り続けていた。
「この近くのはずだけど、分かる？」
襲歩させていた馬をなだめ、速度を落とさせた団長が問う。彼は目印を探している。その手助けをしようと、ネリネも団長とともに周囲を見渡していた。
「任せて下さい。加護の力で私も探していますから」

溢れる自信から豪語した後。自分たちを囲む遊歩道の林に対し、僅かに『力』を加えた双眸で視線を撒いた。

すると景色の中に一つ、違和感を見つける。

「見えました！　アレじゃないですか？」

ネリネは一点を指差した。見つめる先の木の幹に、僅かに赤い横線がある。

明らかに人為的なものだが団長はそれに気づけなかった。その目印は、経年でかすれていて、さらには夜明け前だ。常人に見えるはずもない。

ネリネも花騎士の特権である魔力で視力を強化しなければ、同じ結果を踏んでいるだろう。

「お手柄だね。さすが僕ら騎士団の顔だよ」

「えへへっ、そんな褒めないでください。大したことじゃないです」

褒められ、思わず喜んでしまう。団長は目印のあった森へ馬を歩かせた。その際中に、ネリネはポケットから羊皮紙を取り出す。この国の国土を示す地図だ。

「ここから西……森の向こうに目的地だね」

「はいッ」

草むらを踏みつける団長の愛馬の揺れを感じながら、ネリネは答える。

団長とネリネは任務でこの地を訪れていた。ネリネは団長の護衛兼補佐として随伴している。

普段は集団行動が常である花騎士生活において、二人だけの任務という初めての経験に、ネ

リネは不安を感じながらもやる気に満ち溢れていた。彼が随伴を認めたということは、自分の力を認めてくれたということなのだから。

団長は手持ちの方位磁石を見つつ、馬を歩かせた。茂る草むらを超えると、馬がなんとか通れる程度の隘路が存在していた。王国軍から来た事前情報の通りだった。

この先に進むことができるのは、この隠された道の存在を知っている者のみ。

馬の揺れを感じつつ、洞窟のように暗い道を進み続ける。この付近では害虫の存在も確認されている。ネリネは団長の後でいつでも迎撃できるように身構えていたが、その必要もない事をすぐに知る。

――太陽だ……！

気を張りつめらせてからさほど時が経つこともなく、道の果てが見えたからだ。

奥から差し込む光が自分たちを照らす。焼けるような眩しさに、思わず団長もネリネも腕で目の前を覆う。その後に見えた景色を捉えて、ネリネは湧き上がる衝動から思わず笑顔になった。

「わぁ……ここ。キレイ！」

森の向こうは、秘境だった。

朝焼けを受けて黄金色に輝く大地。至る所に伸びている農道の間には、豊かな稲穂が元気そうに育っていて、そよ風に吹かれている。景色の中央には人が住んでいるらしい集落も見受け

られる。確か地図によると、この土地の近くにはベルガモットバレーの国境も存在したはずだ。故に他国から伝統的とも称される『和』の文化に影響されているのか、集落の建築物の殆どは合掌造りと呼ばれる三角形の屋根が並び立っていた。

遊歩道から森を隔てて、このような場所が存在しているとは知らなかった。

「無事着きましたよ！　団長さん！」

ネリネは前方を指差しつつ、思わず弾んだ口で団長に叫んだ。トラブルや害虫との会敵もなく無事に目的地に着けたことが嬉しいのもある。が、自分たちの目指した場所がこれほどまでに美しい景色とは思わなかったからだ。

「そうだね。朝早くから来た甲斐あったよ」

団長はネリネの満面の笑顔に対し、ただ一言そう返して微笑んだ。控えめな彼だが、自分と同じ感想を抱いてくれていることからより一層嬉しくなる。

――今日はここで、私たちのお仕事をするんだ。

ネリネは期待を抱きながら、両手を胸元に寄せた。

スプリングガーデンに一般流通している地図に載っていない、まさに隠れ里と言うべき地、ブランカヒルズ。その入り口にたどり着いた二人はこの地を治める者、里長の家を目指して進んだ。